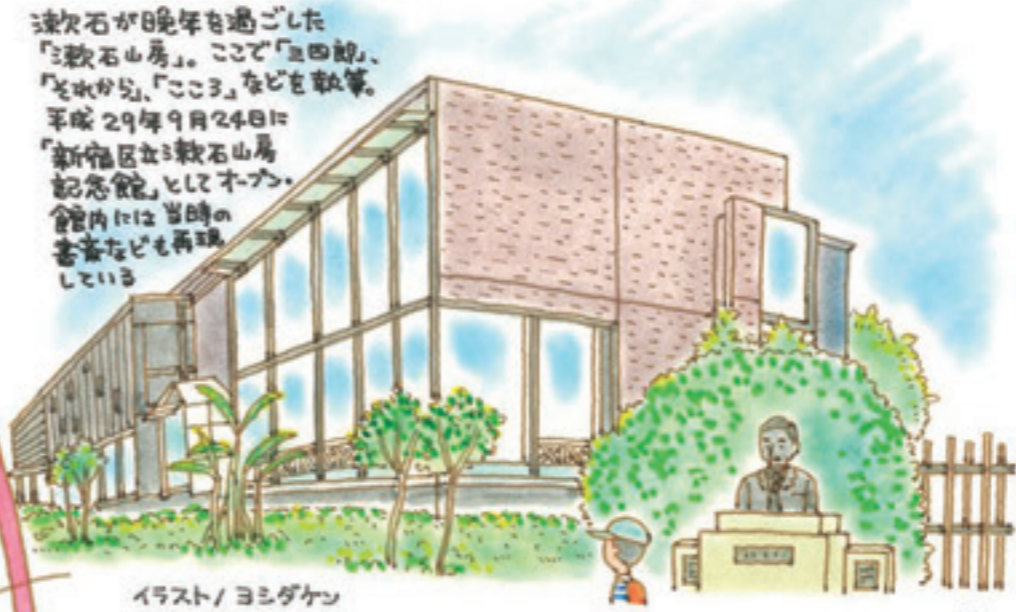


9月24日  
オープン

# 新宿区立漱石山房記念館特集 夏目漱石と新宿を知るぶらぶら散策



今年で生誕150周年を迎える夏目漱石。神楽坂から早稲田大学周辺まで漱石にまつわるポイントも歩いてみた。途中、「おたくまでですか?」50代後半のカメラマンが男性に声をかけられた。どうやら彼にとってもここは聖地。他ならない。生誕の地から漱石山房記念館に向けて足早に立ち去っていった。



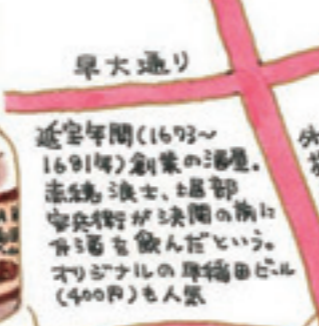
漱石が晩年を過ごした「漱石山房」。ここで『道草』、『道草』、『道草』などを執筆。平成29年9月24日に「新宿区立漱石山房記念館」としてオープン。館内には当時の書斎などを再現している。

イラスト/ヨシダケン



生家は江戸時代に町方名主を勤めた名家。喜久井町の名は夏目家の家紋「五井筒」に由来。漱石は「井筒」に「石」を添えて「石」にちなむもの。

漱石は明治25年から同28年まで早稲田大学で講師を務めた。友人の親と早稲田界隈を散歩もした。



延宝年間(1673~1691年)創業の酒屋。志保 浪士、土屋 守兵衛が決闘の前には酒を飲んだという。オリジナルの早稲田ビール(400円)も人気。

水稲荷神社  
『彼岸過迄』の中に登場する神社。現在の社地は戦後に移されたもの。うっそうとした境内が神秘的。



夏目鏡子夫人が虫刺しにお参りした神社。朱色が緑に映えて豪華絢爛。

漱石は父が名づけた「夏目漱石」を随筆「硝子の戸」の中に「漱石」を書き残している。



尾崎紅葉をはじめとする文藝者が相馬屋の茶室用紙を使用した。漱石も使ったことがある。『新宿山ノ手七福神』のひとつ、朱塗りがひとつ。目を引く寺。漱石が胃腸のため境内で休んだ。

坊主の出身は東京物理学校。現在は東京理科大学近代科学資料館として復元されている。

## 夏目漱石が 名作を執筆した 「漱石山房」

今から150年前の慶応3(1867)年、文豪・夏目漱石は現在の新宿区喜久井町に生まれました。英語教師や英文学者を経て『吾輩は猫である』『坊っちゃん』など初期の代表作を送り出し、人気作家となった漱石は、ちょうど110年前の明治40(1907)年9月に生家に近い早稲田の地に戻ることとなります。

本格的な作家活動を開始した漱石は、早稲田南町に転居、ここで『夢十夜』『三四郎』『それから』などを次々に書き上げます。『漱石山房』と呼ばれたこの家では毎週「木曜会」に友人や門下生が集い、熱気があふれていたのです。

しかし明治43(1919)年、胃潰瘍を患い一時危篤に陥る。以後漱石は病と闘いながら『彼岸過迄』『行人』『道草』など、人生の深奥と向き合った名作を送り出してきました。大正5(1916)年に49歳で逝去、連載中の『明暗』(未完)が最後の作品でした。

その漱石山房の跡地に、平成29(2017)年9月24日、新宿区立漱石山房記念館がオープン。戦災で焼失した「漱石山房」の

一部を館内に実物大で再現しました。このほか『道草』『明暗』など漱石山房で書かれた作品の草稿をはじめ、漱石の素顔や人脈などについて見どころ盛りだくさんの展示が見られます。貴重な資料を目にした、漱石が暮らし、執筆した空間に思いを馳せたり、ぜいたくな時間を過ごしてみてもいい。

### 新潮社 新宿区矢来町71

鏡子夫人の実家が近くに所在しており、英国留学から戻った漱石も、一時そこで暮らしていた。 MAP P.14-15 A-2

### 水稲荷神社 新宿区西早稲田3-5-43

「彼岸過迄」の中で登場する神社。当時は現在の早稲田大学キャンパス内(西早稲田1-6付近)にあった。 MAP P.16-17 C-1

### 宗柏寺 新宿区榎町57

漱石山房から神楽坂へ行く途中にある寺。小説「門」の円明寺のモデルとする説もある。 MAP P.14-15 A-1

### 神楽坂 新宿区神楽坂1~6丁目

大正から昭和初期にかけて「山の手銀座」と呼ばれ、随一の繁華街として賑わった。この坂で、お見合いしたばかりの漱石と鏡子夫人がすれ違った。 MAP P.14-15 C-2

### 薬店(地藏坂) 新宿区袋町10

薬を売る店があったことから「薬店」と呼ばれた坂。色物講談を得意とした「和良店亭」という寄せがあった。落語好きな漱石も足繁く通った。 MAP P.14-15 C-2